

新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」 第2回全体集会

日時：2009年7月11日（土）13：00－18：00

場所：北海道大学スラブ研究センター4階大会議室

● 領域研究活動報告 13：00－13：40

領域代表および各班研究代表者

● 第1セッション「ジェンダー論による地域比較の可能性」 13：50－16：00

栗屋利江（東京外国語大学）「近代インドにおける国民国家の表象とジェンダー」

小浜正子（日本大学）「中国近現代のナショナリズムとジェンダーの表象」

前田しほ（北海道大学）「現代ロシア女性文学におけるジェンダー理解とその可能性」

コメント：篠原琢（東京外国語大学）

● 第2セッション「帝国・地域大国の歴史認識」 16：10－18：00

守川知子（北海道大学）「近代イランの自画像」

小笠原弘幸（青山学院大学）「近代オスマン帝国における世界史叙述と「トルコ」」

コメント：村田雄二郎（東京大学）、宇山智彦（北海道大学）

企画のねらい：

第4班が中心となって企画した今回の全体集会では、研究進捗状況の報告に続き、具体的なテーマに沿って比較地域大国研究の方法を議論した。

第1セッションでは、この領域研究において班を超えた共同研究のテーマの一つとしている、ジェンダーの問題を取り上げた（これは、従来スラブ研究センターで行われる研究会でジェンダーが取り上げられることが少なかったのを補う意味もある）。ジェンダー理解には地域差があると同時に、国家の表象やナショナリズムにも関係する問題であり、比較研究のテーマとして適している。このセッションでは、インド、中国、ロシアの例に則した報告に対し、東欧研究者からのコメントを聞くという形をとった。

第2セッションは、帝国の近代化の過程で歴史認識がどのように変容し、現在の地域大国の意識につながっているかという問題意識から企画した。イランとオスマン帝国に関する報告に対し、中国研究・中央アジア研究の視点からのコメントを加えることにより、比較の議論を組み立てることを試みた。

[企画担当者：宇山智彦]

第1セッション

今回の報告は、どれも女性性を中心に扱うものであったが、男性性の問題を含めて、これからの議論の深まりが大いに期待される分野であることが改めて確認されることとなった。なお、栗屋報告、小浜報告では、ヴィジュアル資料がふんだんに用いられ、前田報告は多数の小説からの引用が紹介されて、3 報告ともに具体的で聴衆を惹きつけるプレゼンテーションであった。

栗屋報告：

「近代インドにおける国民国家の表象とジェンダー：「バーラト・マター」をめぐる」と題された栗屋利江氏の報告は、近年のインドにおいて、ヴィジュアル・ターンとも表現される現象がおきていることと、1980年代以降に盛んになったジェンダー研究の進展という状況を踏まえ、国民国家が普遍的な女性像として表象されることの問題を、豊富な図像をもとに検討した。栗屋氏によれば、1905年のベンガル分割が、女性像が分割される土地=ベンガルとして公共圏で表象される転機であった。そこで描かれる女性は、母（神）であり、うら若き女性であった。その後、同様の女性像がインドを表象するものとして描かれるようになる。彼女たちは常に、地図に重ね合わされたり、テロリストやガンディー、ネルーなどの建国の勇士といった個人名を持つ英雄的男性を伴ったりする、普遍的な女性であった。その図像は、カーストを超越したインドの一体性、正統性やパワー・癒しの源泉、男性にとっての *desire* などとしての意味を有する。そこには、フランスのマリアンヌやイギリスのブリタニアとの比較を可能にする多くの要素が存在しているだろう。国家の象徴としての女性をヴィジュアル資料をもとに研究することは、帝国研究の権力・排除の構造の分析を深めるために有益であることが指摘された。

小浜報告：

小浜正子氏の報告では、近代以降の中国女性がどのような視線にさらされ、それに対してどのような自己像の変革を試みてきたのかという問題が時間軸にそって整理された。前近代にあつては中国文明の精華とみなされた纏足が、まず、西洋人から、次いで中国人男性知識人の視線から、奇形・不自然なものとみなされ、彼らの言説を中心に纏足をほどかせる運動が始まった。1920-30年代の中国では、西洋的審美眼から見て美しい曲線美を強調する「チャイナ・ドレス（新式旗袍）」が国民服として登場する。「チャイナ・ドレス」は、近代教育を受け、主体性を持った近代中国を担う女性の象徴としても機能した。一転して、社会主義の中国では革命による女性の解放が叫ばれ、「鉄姑娘（鉄の娘）」、すなわち男性化した女性が理想像とされた。現実にはこの解放によって、女性には公的・私的領域の二重負担がのしかかることになる。80年代以降の改革開放の中国では、その反動のように「女性性」が復活していく。再び「チャイナ・ドレス」をまとった女性は、映画などで西洋的なまがしの欲望に応える、神秘的な封建的東洋の美女として立ち現れる。しかし中国が大国として自己主張す

るようになった 2008 年の北京オリンピックの開会式では、中国文明の偉大さの表象として男性によるマスメディア的群衆などが演じられた。女性性・男性性の表象は、一貫してハイ・ポリティクスやオリエンタリズム的視線の強い影響のもとに創造され続けられている。

前田報告：

前田しほ氏は、女性の手によるロシア語小説の分析をもとに、書き手の女性自身の意識がいわゆる欧米型のフェミニズムの主張にしばしば真向から反対するものであることを論じた。1960-70 年代には、都市に住む高学歴のインテリ層＝中間層が育ち、これに属する女性たちは、公的な領域からこぼれおちる生活への視点、またその生活の中で自らが直面した経験や感情を作品の中へ書き込んでいった。その作品には、女性の過剰労働や苦悩も描き出されるが、そこには西洋フェミニズムによる女性問題の告発という視点だけではとらえきれない問題が含まれている。というのもロシアの女性作家の多くは、男女の悪平等を批判し、各ジェンダーにふさわしい役割分担を求めるからである。このような考え方は、欧米型の視点からすれば「遅れている」と印象づけられてしまう。両者の矛盾が生じる理由として、西の女性が、男性的価値や行動様式を疑問視し、女性主体の確立を重視するのに対して、東の女性は「女性の権利」ではなく「人間としての平等」や「職業と家庭の両立」を課題にしていることを前田氏は重要視する。そのような東の女性の意識は、高い就業率や経済的な自立志向といった社会現実にも支えられている。男女の平等がほぼ実現した旧社会主義国出身の思想家 J.クリステヴァによる「男女の際の消滅や和解を目指すのではなく、その差異の構造そのものを見つめなおす」という提案が、ジェンダーの問題を考える上で重要であることが、多くの女性文学作品からの引用による裏付けを伴って、指摘された。

篠原コメント：

- ・ジェンダー表象と実際に生きられる生：分けて考える？ 結びつける？

表象重視 — 中庸 — 実際の問題

栗屋報告 — 小浜報告 — 前田報告

セッションとして、バランスが取れていたという印象

以下、4 つに分けて問題を指摘。

- ① 国/地域によって、ジェンダー研究の進展状況に大きな差異がある。

社会主義国家の中では公的領域が男女分業という形で、強度にジェンダー化されている。本セッションは女性の解放の経験をジェンダー論の視点からどのように考えるのかという問題の所在を示唆。今後の研究の方向性は？

- ② ジェンダーの構築性は、植民地主義、レイシズム、ナショナリズム、階級などと複雑に結びつきながら展開する。

ジェンダーの問題は、公的領域と私的領域を自由に往還する。

さまざまな他領域との関連性の中で論じられるべき問題。

③ 帝國的な変遷の中で表象される性差

啓蒙期のヨーロッパは東欧を性的に奔放な美しい女性として表象、性的ファンタジーが全面的に解放される場でありつつ、中心における性道德の規律化と密接にかかわっている。

小浜報告：「西欧から見られる中国女性」とそれを破壊しようとする革命中国。

帝國的な編成が大きな政治領域だけではなく、非常に親密な圏域にいたるまで入り込んでいることを、ジェンダー研究は明らかにしている。

インドやロシアでは帝國的支配の視線が性的表象にどのような影響を及ぼしたといえるか？

②と③の問題は、ジェンダーの構築性とネーションの構築性、帝国の編成は大変深いかかわりを持っており、極端に発現する場合には、戦時性暴力といった、時によってはある程度儀礼化された暴力の発動を伴う場合もあり、表象にとどまらず現実構築に大きな影響力を及ぼすことを確認しておきたい。

④ 前近代の文明性・宗教性

身分制度の後退化と市民社会の構成員としての男女平等によって、近代においてジェンダーの問題が浮上。

しかし、前近代に蓄えられた男性性・女性性の様々な表象のプールが、近代にいかに援用され、あるいは断絶されるのか？

粟屋報告：「エキゾチック」な男性像・女性像の表象の背景は？

ジェンダー史はほかの領域に幅広く浸透していく、領域というよりひとつの方法。

帝国権力やナショナリズムに新しい領野をひらいていく、共通の比較として考えることが可能。

フロアからの議論：

粟屋報告に対しては、女性性と母性の関係性、母性信仰の在り方、また母性と合わせての「父なるインド」の表現について議論された。また、独立 50 年記念のビデオ・クリップでは、女性の表象よりも多民族の共存やマッチョ・イメージが多用されたことが指摘され、ジェンダー表象とハイ・ポリティクスの関係性が具体的にコメントされた。

小浜報告については、2008 年の北京オリンピックでのチャン・イーモウ演出の開会式が、男性性によって「偉大な中国文明」が表象されているという指摘に対して、そこにおいて表象される中国の民族性が、多民族の融合した中華民族なのか、多数派である漢民族なのかをめぐる緊張関係について議論がなされた。また、都市と農村や世代間でも表象は大きく異なるという問題があり、女性性の表象との複雑な交錯が指摘された。

前田報告に対しては、西欧的アプローチの限界に対して、新たな分析方法を展開すること

の難しさが指摘された。また、読者としての女性の在り方や、中国と同じく、女性の二重負担の問題についても議論があった。

コメントでも指摘されているように、ジェンダーは、オリエンタリズム、ナショナリズム、レイシズムなどの構築主義の議論を深めていくための、重要な方法であり、ジェンダー問題を論じることが、帝国の権力、近代社会の政治力、社会心性などさまざまな問題の構造を掘り下げていくことになるはずであるという意識を、本セッションを通じて参加者が広く共有することができた。また、植民地の過去、帝国の視線、社会主義の日常生活などの問題設定を通して、地域比較を深めていくことの手ごたえを感じさせるセッションとなった。

[第1セッション概要文責：高橋沙奈美]

第2セッション

このセッションでは、「帝国」の歴史認識の問題が扱われた。近代になって非西洋の帝国秩序が徐々に再編される中で、前近代までの帝国の歴史叙述と自己歴史認識がいかに変容して行ったのか、という問題に関して、今回は中東イスラーム世界を代表するイランとトルコ両地域のケースが報告された。

最初に北海道大学の守川知子氏が「近代イランの自画像」という題名で、19世紀ガージャール朝イランにおける歴史叙述と歴史認識の変遷を報告した。一般にイランは「帝国」とは呼ばれないものの、他のイスラーム諸帝国と同様に王朝史が書き継がれ、ガージャール朝の初期もそうした伝統に沿った歴史叙述がなされていた。すなわち、歴史は大きくイスラーム時代以前と以後に分けられ、前者は、ムハンマドより前の「預言者伝」とイラン諸王の列伝である「帝王伝」が、後者は各時代の王朝史が描かれた。しかし19世紀前半にイギリス人が、古代ペルシアやヨーロッパの史資料に依拠してアケメネス朝などの古代ペルシアの栄光を「発見」し、そうした東洋学の成果を元に「イラン史」を出版すると、19世紀後半のナーセロディーン・シャー時代の近代化の動きとも相まって、それまでのイスラーム的伝統とは異なる新たな歴史叙述がイランでも見られることになった。それは例えば、実証主義的な科学としての「歴史学」を志向する傾向、アラビア語やアラブの歴史叙述を極力排除しようとするイラン人意識、そして広く世界史の中にイランの歴史を位置づけようとする試みなどであり、特にイラン古代史の叙述を重視するナショナリズム的傾向が表れることとなった。こうして「イラン史」という概念の西欧からの輸入により、イランでは19世紀後半以降、伝統的なイスラーム王朝の歴史叙述から、ナショナルな歴史叙述への変容が見られたことが明らかにされた。

続いて「近代オスマン帝国における世界史叙述と「トルコ」」というタイトルで報告した青

山学院大学の小笠原弘幸氏は、19世紀半ばから帝国滅亡の1922年までに著されたオスマン帝国における歴史書の構成の変化を、「トルコ」の扱われた方に焦点を当てながら分析した。前近代においては、王朝の起源としてトルコ系オグズ族の伝承が用いられたものの、「トルコ」とは一般にアナトリアの田舎者を指す否定的な言葉であり、歴史書の構成についても、天地創造から諸預言者の登場、イスラーム諸王朝の興亡、そしてオスマン帝国という叙述が一般的であった。しかし19世紀後半になると、西欧の歴史書の影響を受けて、例えば古代トルコ史の叙述が現れるなど、「トルコ」の民族性に光が当てられるようになり、イスラーム史、あるいは世界史におけるトルコ民族の役割が強調され、また同時に、王家の起源に関する神話的要素が排除されていった。こうしてイランと同様にオスマン帝国においても、19世紀に西欧からのナショナル・ヒストリーという概念の受容が見られ、それにより王家の起源に代わり民族の起源が前面に押し出されて、それがトルコ・ナショナリズムへとつながっていったことが明らかにされたが、同時に帝国の公式のイデオロギーとしては、帝国崩壊まで、諸民族をオスマン臣民としてまとめようとするオスマン主義が放棄されなかったことも指摘された。

この両報告に対して東京大学の村田雄二郎氏と北海道大学の宇山智彦氏がコメントを行った。村田氏は特にオスマン帝国のケースと中国のケースを比較し、トルコ主義とオスマン主義との緊張関係と、漢民族的歴史観と中華民族的歴史観との関係には類似した面があり、また西欧の歴史叙述が国民史叙述のモデルを提供した点についても共通していることを指摘したうえで、このような帝国における歴史叙述・歴史認識と、実際の帝国解体過程との関係を政治史の観点からも明らかにする必要性を強調した。一方、宇山氏は、両報告をより広い世界史的な文脈に位置づけるため、王朝の事績から国家と社会構造への叙述内容の変化、近隣に対する「他者」認識の変容、民族・国家の領土的正当性などに関わる「領域」をめぐる記述の出現など、王朝史・部族史から国民史・民族史への移行過程で一般的に見られるいくつかの現象を提示し、比較史の視点からイランとオスマン帝国の場合を、より具体的に検証する必要性を述べた。続いてフロアの参加者から、こうした「新しい」歴史叙述の担い手について、また19世紀の歴史叙述の変容過程における他の帝国の影響（同時代性）の有無、さらに科学的歴史研究の導入と歴史叙述の問題を分けて扱う必要性、などの疑問やコメントが寄せられた。

これらの質問やコメントに対する回答として守川氏は、イランにおいても西欧の学問の受容がナショナル・ヒストリーの叙述に決定的に重要な役割を果たしたこと、19世紀のイランの歴史研究は内向きであり、歴史叙述や歴史認識に他の帝国の影響があったとは考えにくいこと、イランにおける歴史記述の担い手は世俗的知識人ではなく、宮廷内の高位高官であったことなどを述べた。一方小笠原氏は、19世紀のオスマン帝国におけるトルコ主義・オスマン主義・イスラーム主義間の関係は、明確に区分できる性格のものではなく、例えば一人の

人物が複数の主張を折衷して支持するなど、極めて複雑であったこと、オスマン王家の歴史の切り捨てと国民の歴史叙述への登場は、宇山氏指摘の一般的な現象と合致していること、などを述べた。

時間の制約上、報告者はコメントや質問の全てに返答することは出来なかったが、報告と議論を通じて、帝国秩序の変容と崩壊から地域大国の出現を考察する上での様々な論点が明らかとなり、非常に有意義なセッションとなった。

[第2セッション概要文責：黛秋津]